

谷崎潤一郎著

文章讀本 完

中央公論社版

文章読本

中公文庫

©1975

昭和五十年一月十日初版
昭和六十年二月十日19版

著者 谷崎潤一郎

発行者 嶋中鵬二

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二二三四

ISBN4-12-200170-6

定価 二六〇円

中公文庫

文 章 読 本

谷崎潤一郎著

表紙・扉 白井晟一

この読本は、いろいろの階級の、なるべく多くの人々に読んで貰う目的で、通俗を旨として書いた。従って専門の学者や文人に見て頂けるような書物でないことは、論を待たない。それにしても、今まで私はこう云う種類の述作をしたことがないので、順序の立て方、章節の分け方等に妥当を缺くものがあるかも知れないが、そう云う点は、不馴れのためとして御諒恕を願いたい。

私は、自分の長年の経験から割り出し、文章を作るのに最も必要な、そうして現代の口語文に最も缺けている根本の事項のみを主にして、この読本を書いた。その他の細かい点、修辭上の技巧等については、学校でも教えるであらうし、類書も多いことであるから、こゝには説かない。云わばこの書は、「われ／＼日本人が日本語の文章を書く心得」を記したのである。

なお、最初に企図した事柄は洩れなく述べたつもりであるが、たゞ慾を云えば、枚数に制限されて引用文を節約したのが残念である。文章道に大切なのは理窟よりも實際であるから、一々例証を挙げて説明することが出来たならば、読者諸君の同感を得る上に、よほど助けになったに違いない。依って、他日機会があったらば、今度は引用文を主にした、この読本の補遺となるべきものを編述したいと思っている。

昭和九年九月

文章読本 目次

一 文章とは何か

二七

○ 言語と文章

二七

言語——言語の効用——思想を伝達すると共に、思想に一つの形態を
与える——言語の缺点——思想を一定の型に入れる——言語の働き
は不自由であり、時には有害であること——文章——言語と文章との
区別——文章の永続性

○ 実用的な文章と藝術的な文章

二〇

文章に実用的と藝術的との区別なし——美文体——韻文と散文——
この書は韻文でない文章、即ち散文を説くのを目的とする——韻文や美
文の条件、一 分らせること、二 眼で見て美しいこと、三 耳で聞いて
快いこと——口語文——小説の文章——実用的即ち藝術的——実

用文にも技巧が必要であること

○ 現代文と古典文

口語体と文章体——口語体を書くコツは文章体を書くコツに同じ——
古典文学——和文調と漢文調——和漢混交文——擬古文——字面
と音調——「分らせる」ことにも限度があること——口語体の缺点——
——文章の秘訣——古典文の特色——今から九百年前の文章——文
章の音楽的效果と視覚的效果——文章を書くには、読者の眼と耳とに訴
えるあらゆる要素を利用すべし——第一の条件——「分らせる」ように書
くこと、第二の条件——「長く記憶させる」ように書くこと——字面——視
覚的效果について——われ／＼の国語と形象文字——日本語の言葉は、
漢字と平仮名と片仮名と、普通三通りに書き得ること——漢字の缺点——
——平仮名の美点——音調——音楽的效果について——音読の習慣が廃
れたこと——朗読法——音読の習慣がすたれても声を想像しないでは
読むことが出来ない——漢字濫用の弊害と音読との関係——文章を綴
る場合には、まずその文句を暗誦し、それがすらくと云えるかどうかを
試すことが必要——寺子屋式の読み方——素読——読書百遍意自ら

通ず——「分らせる」ように書くことと「記憶させる」ように書くこととは二にして——文章の感覚的要素——現代文に見る感覚的要素——書簡文——候文——候文の特色——文章の間隙

○ 西洋の文章と日本の文章

系統を異にする二国語の間には踰え難い垣がある——今日の急務は、西洋文の長所を取り入れることではなく、取り入れ過ぎたために生じた混乱を整理するにある——支那語と日本語との構造の差異——われ／＼の国語の缺点——言葉の数が少いこと——語彙——国語と国民性——日本語の語彙が乏しいのは我等の国民性がおしゃべりでない証拠——我が国民性は寡言沈黙を貴ぶ——巧言令色鮮矣仁——日本語はおしゃべりに適しないように出来ている国語——国民性を変えないで、国語だけを改良することは不可能——西洋の学問と日本語の文章——この読本で取り扱うのは、専門の学術的な文章でなく、一般の実用的な文章——語彙が貧弱で構造が不完全な国語には、一方においてその缺陷を補うに足る長所がある

二 文章の上達法

六二

○ 文法に囚われないこと

六一

文法的に正確なのが必ずしも名文にあらず——日本語には西洋語にあるような文法はない——日本語には正確なるテンスの規則なし——日本語のセンテンスは主格を要せず——日本語は習得に困難なる国語——初学者は一応日本文を西洋流に組み立てる方がよいかも知れないが、相当に文章が書けるようになったら、文法を考えない方が宜しい

○ 感覚を研ぐこと

六九

文章のよしあしは曰く云い難し、たゞ感覚を以て感ずべきのみ——名文とはいかなるものぞ——長く記憶に留まるような印象を与えるもの、繰り返して読めば読むほど滋味の出るもの——名文と悪文との差は紙一と重——文章の味は藝の味、食物の味と同じ——感覚は、生れつき鋭い人と鈍い人がある——心がけと修業次第では、鈍い感覚をも鋭く研ぐ

ことが出来る——出来るだけ多くのものを繰り返し読むこと、実際に自分で作ってみること——感覚は何度も繰り返すうちに鋭敏になる——寺子屋式教授法は感覚錬磨の手段——感覚は、一定の錬磨を経た後には、各人が同一の対象に対して同様に感じるように作られている——文章は人に依って多少好む所を異にする——甘口と辛口、和文脈と漢文脈——源氏物語派と非源氏物語派

三 文章の要素

八三

○ 文章の要素に六つあること

八三

文章の要素、一 用語、二 調子、三 文体、四 体裁、五 品格、六 含蓄

○ 用語について

八三

異を樹てようとするな——一 分り易い語を選ぶこと、二 使い馴れた古語を選ぶこと、三 適当な古語がない時に新語を使うこと、四 古語や

新語がない時でも、造語は避けるようにすること、五　むずかしい成語よりは耳馴れた外来語や俗語の方を選ぶこと——同義語——最適な言葉はたゞ一つあるのみ——最初に思想があって然る後に言葉が見出だされる場合と、言葉があつて然る後に思想が纏められる場合と——最初に使つた一つの言葉が思想の方向を定め、文体や文の調子を支配するに至る——

——言霊——言葉の魅力——人間が言葉を使うと同時に、言葉も人間を使う——語と文字——白楽天の心がけ——古語と新語——漢字の重宝さから来る弊害——言葉は符牒であることを忘れるな——職人の技術語を参考とせよ——略語——世話に碎ける

○ 調子について

文章の調子は、その人の天性に依るところ最も多し——体質と調子との関係——調子は精神の流動であり、血管のリズムである——流麗な調子——センテンスの切れ目のない、一つの連続した文章——日本文には事実上の主人公あるのみにて文法上の主格なし——これこそ最も日本文の特長を発揮した文体——簡潔な調子——冷静な調子——調子のない文章——言葉の流れ——流露感——流れの停滞した名文——

飄逸な調子——ゴツ／＼した調子——悪文の魅力

○ 文体について

一二

雅俗折衷体——一 講義体、二 兵語体、三 口上体、四 会話体——

——本当の口語文——書いた人の声音や眼つきを想像させる役をするもの

——男の話す言葉と女の話す言葉と違うのが日本語の長所——会話体

の特長、イ 云い廻しが自由であること、ロ センテンスの終りの音に変化があること、ハ 実際にその人の語勢を感じ、微妙な心持や表情を想像し得られること、ニ 作者の性の区別がつくこと——われ／＼は男女孰れの声を想像しながら文章を読むか——会話体の文章は作者の性を区別し得られる

○ 体裁について

一三〇

体裁とは文章の視覚的要素の一切を指す、イ 振り仮名、及び送り仮名の問題、ロ 漢字及び仮名の宛て方、ハ 活字の形態の問題、ニ 句読点——総振り仮名と字面との関係——ルビ、総ルビ、パラルビ——森鷗外の文字使い——言葉の由来に溯って語源の上から正しい文字を宛てる

方法——日本の文章は読み方がまち／＼になることをいかにしても防ぎ難し——文字使いを、偏えに感覺的要素として扱う方法——視覚的効果として見た鷗外の文字使い——文字使いから見た鷗外と漱石——スタイル・ブック——活字の大きさ——活字の種類——句読点も合理的には扱い難し——疑問符と感嘆符——引用符

○ 品格について

品格とは文章の礼儀作法——一 饒舌を慎しむこと、二 言葉使いを粗略にせぬこと、三 敬語や尊称を疎かにせぬこと——品格ある文章を作るには精神的修養が第一——優雅の心を体得すること——優雅とは何ぞや——われ／＼の国語の一特色——日本語は、敬語が驚くほど豊富である——日本人ほど礼節を重んずる国民なく、日本語ほど礼節にかなう国語なし——あまりはつきりさせようとせぬこと——意味のつながりに間隙を置くこと——われ／＼は、生な現実をそのまま語ることを卑しむ——言語と事実との間に薄紙一と重の隔たりがあるのを好しとす——現代のいわゆる口語文は実際の口語よりも西洋語に近い——文章の間隙を理解するには昔の書簡文を参考とすべし——文章の穴——現代

の文章の書き方は、あまり読者に親切過ぎる——言葉は、丁寧な、正式な形で使うべきこと——ぞんざいな発音をそのまま文字に移さぬこと——東京人の言語の特色——小説家が会話を写す時の心得——敬語の動詞助動詞が文章の構成に与える便宜——敬語は単に儀礼を整えるだけの効用をしているのではない——敬語の動詞助動詞は美しい日本語を組み立てる要素の一つ——敬語はわが国語の利器——女子の文章には敬語を使うようにしては如何——講義体は敬語を使う文体に適せず

○ 含蓄について

一七七

含蓄とは何ぞや——この読本は終始一貫含蓄の一事を説く——里見弴氏の書き方の特色——一流の俳優は大袈裟な所作を演ぜず——形容詞や副詞の濫費を慎しめ——悪文の実例——比喻について——技巧の実例——言葉を惜しんで使う——「蘆刈」の一節——要するに感覚の錬磨を怠るなかれ

文章讀本